

人材確保・育成に関する保育士養成校と保育所の連携に関する研究1

研究代表者	三浦 修子(至誠第二保育園園長)	
共同研究者	高橋 久雄(昭和女子大学教授)	高橋 滋孝(万願寺保育園園長)
	松田 典子(実践女子大学助教)	斉藤 清美(しせい太陽の子保育園副園長)
	小山 廣重(至誠あずま保育園園長)	高橋 智宏(至誠第二保育園副園長)
	廣瀬 優子(しせい太陽の子保育園園長)	高橋 紘(至誠第二保育園顧問)

研究の概要

一般的に減少傾向にある保育所への就職希望者のアップと保育士養成校の協力をもとに学生の就職率アップにも繋がることから共同研究として取り組んだ。

先行研究から参考になるキーワードとして「実習前の準備をよくした学生は実習で充実感を味わい、さらに就職希望へとつながっている」。この事例を保育所職員向けのアンケートで学生時代の実習についての設問にし、調査対象は、入職3年目までとした。現状把握として、現在働いている職員は学生時代に実習の準備を良くして、実習での充実感が就職に繋がっていたのか、実習での充実感がどこから得られていたのかを把握できるようにした。回収は60名。保育実習体験が保育所保育士としての就職意欲に関与することを調査するにあたり、数量的な分析で実習の充実感が就職につながっていることを確認し、自由記述による質的分析で実習が充実したものになったかを検証した。ここから得られる傾向性は、保育所、養成校としてもこれからの実習生の指導に活かすことができると思われる。実習に関する項目については、部分実習よりも全日実習の準備を良くした割合が多く、保育実習全般の自己評価としては充実感を感じている人がほとんどだった。実習体験と保育所への就職希望の関係については、入学時と最初の実習終了後では、一たん減少するが、最後の実習では増えている。実習体験が就職の方向性を左右していることが見える。自由記述から見える傾向性としては、小さい頃の保育所での体験、職場体験、ボランティア等が影響を与えていることが分かり、保育実習では、園児といかに関わられたかや指導職員に褒められたことが手ごたえに繋がっている。分析からは、保育所実習でいかに好印象を与えられるかが保育所就職希望へと関連があることが分かった。今回、自由記述にみられた内容がひきだせるような項目立てになっていなかったたので次回の課題とする。保育士養成校の学生アンケートでは、保育所への印象や就職希望の方向性、就職時選択の基準となる傾向性が見える内容に検討を重ね、1月に養成校2校にて実施した。今回の研究はプリテスト実施までとする。結果分析、課題検証、効果確認については次年度に引き続き行う。

キーワード：人材育成、保育園と養成校の連携、保育実習の自己評価、将来の職場選択、実習体験と将来の進路

はじめに

少子化と呼ばれて久しいが、都市部では待機児対策が不可欠となっている。待機児解消のために新園の開設や定員外の受入れ等受容を満たすべく努力する中で、聞こえてくるには保育士不足。保育所への就職希望が減少しているのではないかとの危機感が生じてきている。

保育所の視点からは、必要人数の確保、質の維持からも対策を講じなければならない段階にきている。質の高い保育を行う上で、人材の養成と育成の連続性を効果的に進めていく。

保育士養成校ではどうであろう。養成校にも少子化ということでは学生数の変化が生じてきている。就職率に

よって養成校が選ばれる傾向もあるので、保育所に受け入れられる人材の養成は大きな課題であろう。保育士資格保持者が安心して保育所に就職することができるような働きかけが必要であろう。

優秀な学生を受け入れることで就職率にも影響となると、保育所と保育士養成校が現状の中から課題を明らかにし、互いに良い解決策を見出していきたいと思う。

I. 研究目的

- ① 保育士資格取得を目指した学生が、出来るだけ多く保育所に就職するようにするには、いかなるかが考えられるか。

- ② 障害となるものが有るとすれば、それがどこにあるのか、どのようにして取り除くことができるか。
- ③ 保育園側からの考察。
- ④ 養成機関側からの考察。

Ⅱ. 研究方法

先行研究を探し、その内容の精査をする。次に保育園職員のうち最近就職した職員から、養成機関在学中の経験を聞く。次に養成機関在学中の学生から保育園就職に関する意向を聞き、問題点を探る。

1. 先行研究の検討

(1) 文献の収集

各研究員が文献、資料を持ち寄り、検討を重ねた中に a 『教育実習体験が幼稚園教員としての就職意欲に与える影響』(森田満理子他・川口短期大学こども学科)、b 「保育系短期大学生の進学理由による保育者効力感の縦断的变化」(神谷哲司・東北大学大学院・2010年)があった。

a は幼稚園と保育所という違いはあるが、実習生の状況として参考にすることができた。

実習生を受ける側としての保育施設からの研究は見当たらなかった。

b は保育所養成校への進学のきっかけ(動機)や理由によって在学中の保育者効力感がどのように変化するかについて検討することを目的とした論文である。

(2) 先行研究の要約

a : 森田らによると、教育実習に関して「教育実習Ⅰ終了後、教育実習Ⅱの実施に至った人数は91名であった。入学者のうち33名が実習実施しなかったことになる。その内訳は、辞退者が最も多く18名、次いで科目修得条件を満たせなかった者11名、退学者2名、休学者1名、その他1名であった。これらの学生に対しては、森田らを含むクラス担任が面接し、必要な場合には心理的なサポートをしたり、以後の卒業までの見通しを話すといった指導を行った。

教育実習Ⅱの辞退者18名の理由は以下のようなものであった。

- ・幼稚園教育に対する魅力がもてなくなった学生(8名)。たとえば、幼稚園の保育方針や内容が、学生が理想とするものと大きく異なると感じたため。
- ・幼稚園教員としての業務内容を学ぶ意欲を失ったため(2名)。具体的には、一人の教員が大人数の幼児を担当すること、教員が大量かつ丁寧に教材準備をすることなどであった。
- ・本学科での授業や教育実習Ⅰを体験した結果、教育実習Ⅱを遂行する能力(たとえば、実習記録の作成、責任実習の実施)がないと自ら判断したため(3名)。

・実習実施園における教職員との人間関係を辛いと感じたため(5名)。

・健康に不安があったため(1名)。

これらに対し森田らは個別に学生に面接・対応し、翻意を試みたが成功しなかった、とある。

これらの結果を総括的にみると、入学者148名中実習Ⅰ参加者124名(84%)、実習Ⅱ参加者91名(73%)、実習をやり通した者86名(58%)となっている。入学して実習Ⅰまでの段階で24名(16%)が抜け、実習Ⅰから実習Ⅱの段階で33名(27%)減り、最終的には5名(5%)合計62名(42%)が資格取得を断念という結果になっている。

Table1 アンケート項目への回答結果 森田らの報告書より

各項目の理論的得点範囲は1~5点である。*N=65

	教育実習Ⅱにおける責任実習					幼稚園教諭への就職希望		
	部分実習		全日(半日)実習		総合	入学時	教育実習Ⅰ終了時	教育実習Ⅱ終了時
	準備状況	自己評価	準備状況	自己評価	自己評価			
平均	3.25	2.91	4.02	2.6	4.26	3.05	2.71	3.57
標準偏差	1.23	1.03	1.02	1.1	0.89	1.34	1.21	1.21

「授業では、教材研究の大切さと必要性を繰り返し指導した。教育実習Ⅱにおいて、学生はどの程度準備して実習に臨んだのであろうか。また、準備して臨んだ実習を終えて、どの程度「できた」と自己評価しているのかを明らかにする。」

(中略)「総合自己評価が部分実習の自己評価および全日実習の自己評価よりも有意に高かった。つまり、部分実習と全日実習それぞれについての評価よりも、教育実習Ⅱの3週間をやり遂げたことが、教育実習Ⅱに対する総合自己評価の充実感につながったと考えられる。教育実習Ⅱを終えて、総合的にふり返った時に「かなり充実していた」と回答した学生は「あまり充実していなかった」「どちらかといえば充実していた」と回答した学生よりも、幼稚園教員になりたいと強く思っていると言える。

つまり、教育実習Ⅱにおける充実度の高さが、幼稚園教員への就職希望の高さに結びついていると言える。」

実習Ⅰ修了者のうちの18名(入学者の12%)が実習Ⅱを辞退したことに注目すると、実習幼稚園に於いて実習Ⅰの期間中に学生の意欲を損なう何らかの体験があったと思われる。これに関して幼稚園側からの実習指導上の問題についての情報には触れられていない。また、資格取得者のうち、就職先については触れられていない。

今回、保育園実習に関しても同様なことが起こりうるならば、養成校と保育所が連携を持ちながら、協力して解決に向かう手立てが検討することができれば幸いである。

b：「保育者効力感」とは「保育場面における子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育的行為をとることができる信念」と定義づけられている、という。「214名の女子学生を対象に質問紙調査を行い、進学のきっかけを自成的動機、他成的動機の2側面から構成されることが示され、ともに1年次の保育者効力感との間に関連が見られたものの、2年次には関連がなかった。進学の理由については、クラス分析の結果、積極進学群、社会的価値群、消極進学群、自己興味群の4群に分類された。積極進学群は保育者効力感が高いままであったが、一方で消極的進学群は徐々に低下していった。これらの結果から、在学中の学生を対象としたキャリア・ガイダンスの必要論が論じられた。」とある。

2. 保育園からの考察 ―職員の現状把握から―

（担当：万願寺保育園園長 高橋滋孝）

（1）はじめに

保育所として、良い保育士を確保することは、質の高い保育を提供するための必須条件である。

先行研究によれば、実習前の準備をよくした学生は実習で充実感を味わい、さらに就職希望へとつながっている。そこで当法人の8つの保育所2つの分園に在職している保育士に学生時代の実習についてアンケート調査を実施する。

（2）目的

はたして保育所で働いている保育士は、実習の準備をよくし、実習での充実感が就職へとつながっているのか。

入学時、初めの実習後、最後の実習後で、保育所保育士になろうという気持ちに変化はあったのだろうか。実習での充実感はどこから得られるのか。

本項の目標は、保育所での実習をやり遂げた体験が保育士として保育所に就職しようという意欲に与える影響を明らかにすることである。

そこで、本項では、保育実習体験が保育所保育士としての就職意欲に与える影響を調査するに当たり、数量的な分析により保育実習での充実感が就職につながっていることを確認し、自由記述による質的分析で保育実習をいかに充実したものとなったかを検討する。

（3）方法

ア. 保育士アンケートの作成について

アンケートの項目の選定にあたっては、先行研究（森田・藤枝、2010）を参考にした。

平成23年7月調査項目について検討。

○法人内保育所3年目までの保育士の学生時代の就職意欲と実習の充実度を聞く。これは今後の指導や研修の参考にもなると思われる。（記述統計）

○将来、保育士養成校を卒業し保育所に勤める人に、保育実習の充実度と就職意欲の関係を調べ比較することを想定して項目を設定した。（推測統計）

アンケートは以下の項目で構成された。

I. 保育実習について

1. 全日実習（または半日実習）について全日実習では何をしましたか？（自由記述）
2. そのために必要な教材研究、指導案の作成などの準備はしましたか。（5件法による質問項目）
3. 部分実習について（5件法による質問項目）
4. 保育実習全般に対する総合自己評価（5件法による質問項目）

II. 就職について

1. 学生時代、保育所保育士になるという気持ちに変化はありましたか
2. 入学時（5件法による質問項目）
3. 最初の実習を終えて（5件法による質問項目）
4. 最後の実習を終えて（5件法による質問項目）
5. 印象に残った実習について（あります・特にありません）
6. 実習で指導してくださった先生から誉められたこと（◎）、注意されたこと（△）を教えてください。（自由記述）
7. 実習で配属されたクラスの子どもの反応について、うれしかったこと（◎）、後悔したこと（△）を教えてください。（自由記述）
8. 保育者の仕事について（自由記述）
9. 保育所保育士になろうと思ったきっかけ等（自由記述）
10. 現在通っている後輩に実習や就職について一言アドバイス（自由記述）

イ. アンケートの実施

平成23年7月、当法人の8保育所2分園に在職している入職3年目までの保育士を被験者とした。

アンケート用紙を配布し、7月中旬に回収した。

ウ. アンケート結果の概要

回収した60名分の結果から、無回答項目のあった3名分を含む60名分を数量的分析対象とした。

①実習準備に関する項目について

部分実習よりも全日実習の方がよく準備をしていることが分かる。全日実習の準備を「かなりした」人が34名で全体の56.7%で一番多い。

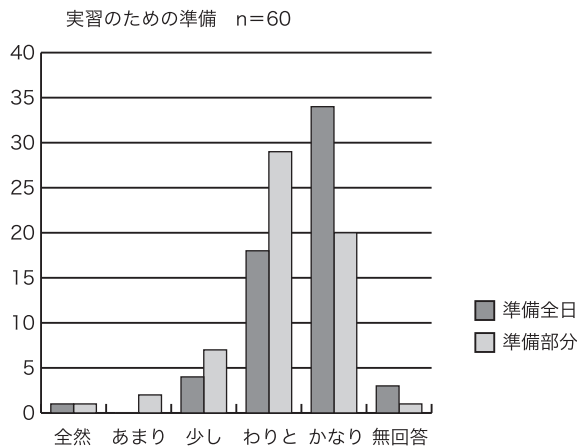
部分実習の準備は「わりにした」人が29名で全体の48.3%と一番多い。

表2-1 実習のための準備

実習のために必要な教材研究、指導案の作成などの準備はしましたか。

		全日実習		部分実習	
		回答数	構成比	回答数	構成比
1	ぜんぜんしなかった	1	1.7%	1	1.7%
2	あまりしなかった	0	0.0%	2	3.3%
3	どちらかといえばした	4	6.7%	7	11.7%
4	わりにした	18	30.0%	29	48.3%
5	かなりした	34	56.7%	20	33.3%
無回答		3	5.0%	1	1.7%
計		60	100.0%	60	100.0%

図2-1 実習のための準備



②保育実習全般に対する総合自己評価

保育実習全般に対する総合自己評価は29人が「わりに充実していた」と答え、「どちらかといえば充実していた」11名と、「かなり充実していた」19名の合計98.3%であった。

表2-2 保育実習全般に対する総合自己評価

保育実習全般に対する総合自己評価

	回答数	構成比	
1	ぜんぜん充実していなかった	0	0.0%
2	あまり充実していなかった	1	1.7%
3	どちらかといえば充実していた	11	18.3%
4	わりに充実していた	29	48.3%
5	かなり充実していた	19	31.7%
無回答		0	0.0%
計		60	100.0%

③実習の経験と保育所への就職希望の関係について

就職について、学生時代、保育所保育士になるという気持ちの変化を問う項目では入学時の平均3.28から最初の実習後に3.20といったん減るものの最後の実習後に3.60と増えている。

これは「かなり思った」人の変化、入学時18名→初実習後12名→最終実習後24名と似たような増減である。

「どちらかといえば思った」人の変化12名→15名→6名や、「あまり思わなかった」人の変化11名→9名→6名から、初めての実習で就職について少し気持ちが揺らぐ人もいれば、実習を経験して就職を意識しだす人もいることが推測され、最後の実習でより強く就職を意識することになったのだろう。

表2-3 気持ちの変化

就職について学生時代、保育所保育士になるという気持ちに変化はありましたか。

		入学時		最初の実習を終えて		最後の実習を終えて	
		回答数	構成比	回答数	構成比	回答数	構成比
1	ぜんぜん思わなかった	9	15.0%	9	15.0%	10	16.7%
2	あまり思わなかった	11	18.3%	9	15.0%	6	10.0%
3	どちらかといえば思った	12	20.0%	15	25.0%	6	10.0%
4	わりに思った	10	16.7%	15	25.0%	14	23.3%
5	かなり思った	18	30.0%	12	20.0%	24	40.0%
無回答		0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
計		60	100.0%	60	100.0%	60	100.0%

図2-2 保育士になるという気持ち

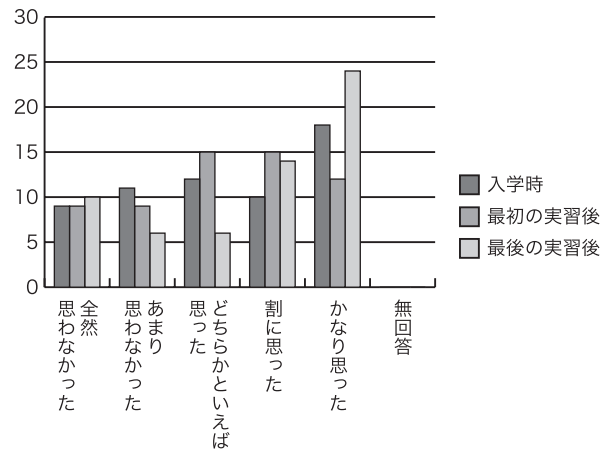
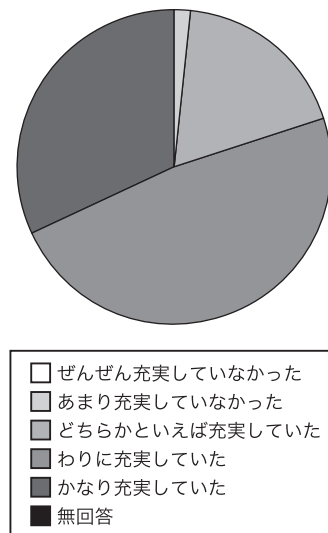


図2-2 保育士になるという気持ち



数量的質問である項目の平均値と標準偏差を以下に示した。

表2-4 実習準備と就職希望

* 5段階で自己評価

	準備		自己評価	就職希望		
	全日	部分	総合	入学時	初実習後	最終実習後
人数(名)	57	59	60	60	60	60
平均	4.47	4.10	4.10	3.28	3.20	3.60
標準偏差	0.76	0.86	0.75	1.44	1.33	1.50

* 人数は無回答を除いた有効数



実習生活動の様子

エ. 自由記述部の回答

自由記述の回答については適切なデータ解析法がないが、保育所保育士になろうと思ったきっかけ等について注目してみた。60人中59人の回答があり、その中から複数回答で分類した。傾向としては「仕事と子育てとの両立への支援に興味があった」—1人や「子どもの成長を守りたい・手助けしたい・成長を見たい」—8人のような保護者や子どもへの援助よりも、「小さいときから子どもが好きだった」—18人、「子どもと交流できる・遊ぶのが好きだった」—7人、「小さいときから保育士にあこがれていた」—7人や、「子どもと長く居られる」—3人、「自分も成長できる」—2人など、自分自身の興味や憧れなどがきっかけとなっていることが分かる。

○「何時ごろ決めたか」について、26人の記述があった。保育園／幼稚園—8人、小学校—2人、中学校—3人、高校—3人、大学—10人と、保育園や幼稚園の頃からの憧れや夢、もしくは大学になってから決定している

人が目立つ。

自身が小さい頃に世話になった保育士や先生に憧れる、あるいは母親が保育士だったほか、「決定体験」の内訳では、実習—4人、ボランティア—3人、見学—2人、アルバイト—1人となっている。



ボランティア活動の様子

○いくつかの自由記述の質問項目の中でついになっている項目の回答数に注目してみた。

「実習で指導して下さった先生から褒められたことを教えてください」が「実習で指導して下さった先生から注意されたことを教えてください。」よりも回答数が多いのは「子どもへのことば掛け」と「子どもとの遊び」であり、「子どもへの指示の仕方」は逆であった。そのことは、次の「実習で配属されたクラスの子どもの反応について、うれしかったことを教えてください。」と「実習で配属されたクラスの子どもの反応について、後悔したことを教えてください。」についても同様であった。「子どもへのことば掛け」と「子どもとの遊び」はうれしかったことが多く回答され、「子どもへの指示の仕方」のみが後悔したことが多く回答されていた。

○対になっている自由記述の項目の中で印象として「実習中の子どもからの働きかけ」に対して嬉しかったと回答している人が多い。また、それは指導している先生から褒められたことでも同様なことが言える。



職場体験の様子

3. 保育士養成校からの考察

(1) 学生へのアンケート実施。

保育士養成校のアンケートの素案は、松田典子実践女子大学助教が担当し、神谷による先行研究(b)の調査項目を参考に、高橋久雄昭和女子大学教授他研究員と調整した。

学生数名にプレテストを試行し、委員会でその結果をもとに再度調査項目を検討した。

第1段階として、保育士資格取得コースのある2大学の協力を得て、H24年1月に実施し、単純集計を行った。

この内容で、保育園現場の保育実習に関する協力関係に連係が持てるかどうか最大の関心事である。

A大学2年生49名、3年生39名、B大学2年生28名、3年生44名、4年生15名の合計175名協力を得ることができた。

項目については以下のとおりである。

I. 学生自身に関して

- (1)学年
- (2)取得予定の資格(複数回答)
- (3)あなたの進学のきっかけ
- (4)前問で保育士と付けた方に、保育士を目指した理由
- (5) 同、保育士になりたい気持ちはどれくらい
- (6) 同、保育士資格を取得したい気持ちはどのくらいか

II. 実習やボランティアの経験について

- (1)保育園での実習・ボランティア経験・段階
- (2)現在保育園でアルバイト、ボランティア有無
- (3)その頻度
- (4) 同、その経験期間
- (5)アルバイト、ボランティアした保育園への就職
- (6)その理由

III. 将来の就職について

- (1)就職希望の職種
- (2)いつまで働きたいか
- (3)大学卒業後何年くらい働きたいか
- (4)保育園に就職する場合の経営形態
- (5)その理由
- (6)就職をする場合、重視すること
- (7)保育園のイメージ
- (8)就職の際にどのように採用募集をしらべるか
- (9)就職先を決める際、求人票に出ている情報以外にほしい情報は
- (10)保育現場での経験(保育実習等)は将来の進路を決める上で役に立ったか。
- (11)どのような点が役に立ったか。
- (12)就職の際に、四年制大学で保育士免許を取得するメリットは
- (13)就職に関する意見は

(2) 調査結果から

- ①進学のきっかけは「小さいときから憧れて」が一番多い。次に「自分の保育園・幼稚園の時の先生が優しか

ったので」と続くが、大学間の差がある。

- ②保育士を目指した理由は、「子どもが好きだったから」87%と2番以下を大きく引き離している。

神谷の研究によると、この動機と「保育者効力感」との関連について触れられているが、今回は時間と報告書紙面の関係で触れないでおく。

次年度以降にこれらとの関係について大学と保育園双方で分析したい。

- ③保育士資格取得についての意識は両大学とも高く、両大学とも全員が資格取得を予定しており、保育士資格取得を目的とした入学であることを示している。

まず、保育士資格の意気込みは各大学とも意識は高く、それも、学年が上がるに従って絶対取りたい率が高くなっている。

以下集計結果の表を示すが、集計表の中の表記は

- A 2……A大学2年生
A 3……A大学3年生
B 2……B大学2年生
B 3……B大学3年生
B 4……B大学4年生

表3-1 保育士資格取得について(%)

	A 2	A 3	B 2	B 3	B 4
絶対取りたい	87.5	94.7	67.9	80.5	86.7
出来れば	12.5	5.3	32.1	19.5	13.3
どちらとも	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
ならない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

- ④保育士になりたい気持ちは、大学差が出ている。A大学は幼児保育専攻の学生で保育士資格と幼稚園教諭免許が取得でき主に2職種である。

一方、B大学は福祉系のコースなので幼稚園教諭資格は無く、保育士資格の他社会福祉士・精神保健福祉士受験資格、高校教諭、児童福祉司等が取得でき、選択の幅が広い。

両大学とも、学年が上がるに従い保育士になりたいという気持ちの学生が増えている。

表3-2 保育士になりたい気持ち(%)

	A 2	A 3	B 2	B 3	B 4
絶対に	37.3	60.5	10.7	20.0	33.3
出来れば	29.4	31.6	28.6	24.4	46.7
どちらとも	33.3	2.6	46.4	31.1	13.3
ならない	0	5.3	14.3	24.4	6.7

- ⑤将来の職種としてA大学の2年生では幼稚園教諭希望と保育士希望がほぼ二分するが3年生になると、保育士の方が増え、幼稚園教諭が減少している。

なお、2年生では複数の職種を選択した学生が49名中36名、3年生が39名中24名いる

図3-1

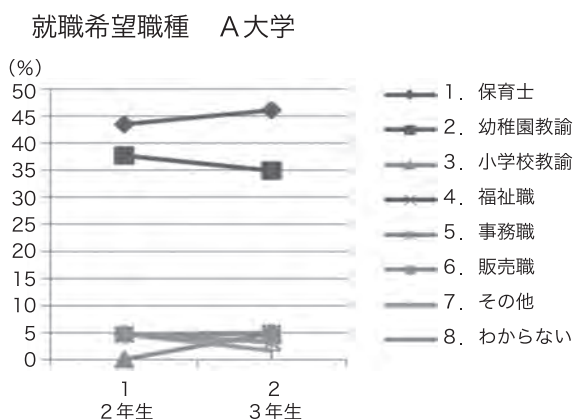
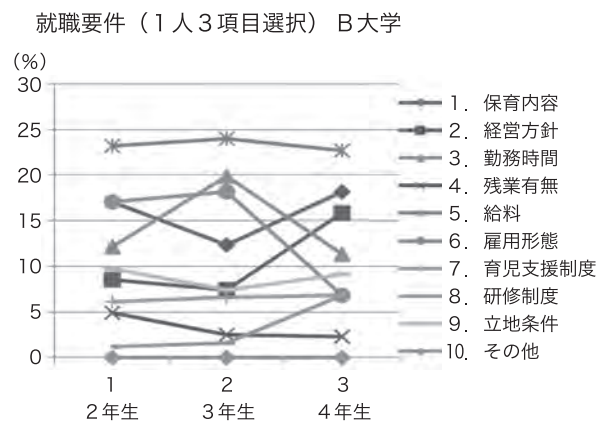
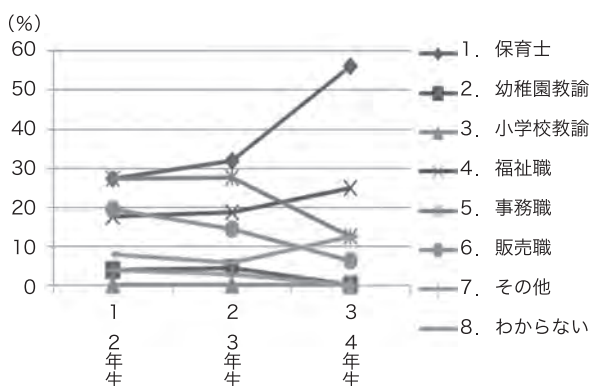


図3-3



就職希望職種 B大学

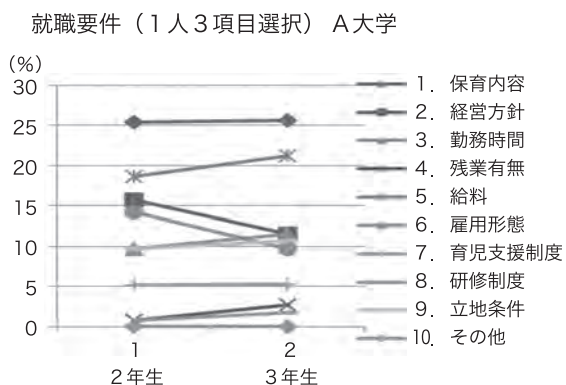


B大学では調査した学科は福祉系のコースなので幼稚園教諭の養成課程は無い。複数回答した学生が2年生28名中23名、3年生が44名中25名、4年生15名中1名であった。保育士になりたいという学生は2年生が27.5%、3年生では31.9%、4年生では2倍以上の57%になっている。

⑥就職の際には何を重視しますか

就職の要件として労条件を重視するのは当然のことながら、次に重視されているのは保育内容であり、学年が上がるに従い高くなっている。

図3-2



⑦実際の保育現場での経験（保育実習等）は、将来の進路を決める上で約にたちましたか？

実習で学んだこととしては、両大学共通事項として「保育の一日の流れが理解できた」より「保育士の仕事が理解できた」が高学年ほど高くなっている。

図3-4

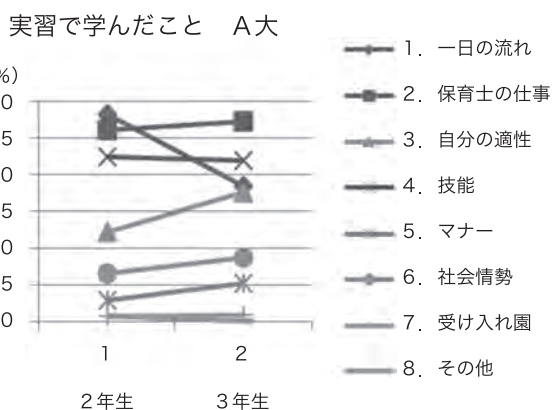
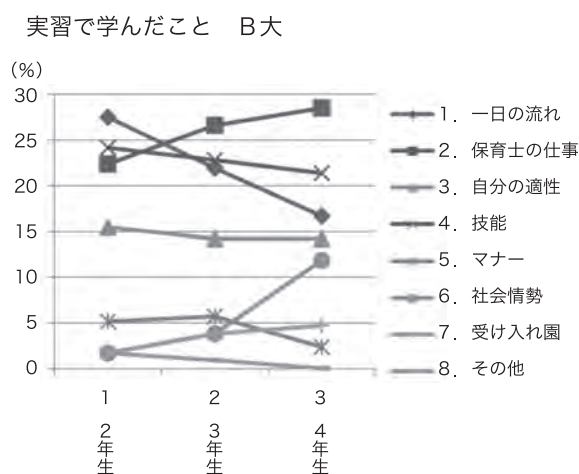


図3-5



5. 終わりに

今回の研究は実習を中心に保育士養成校学生、保育所職員の保育という仕事に向かう意識の変化について調査を実施し、現状を明らかにしてきた。

今回の研究のうち学生に関する調査に関しては時間的な制約から、単純集計にとどめた。

今回の研究で、よい実習が保育園への就職に向かわせるという仮説がほのかに実証されつつあるように感じた。

保育士の資格を取得しようと入学した学生を保育士へと落ちこぼれなく養成していく上で、保育所が保育実習現場として果たす役割が大きいことが再確認できた。

また、就職に際して学生が重視しているのはやはり労働条件であり、保育所が事業所として近代化していかなければならないことも明らかとなった。就職に向けての保育現場からのガイダンスなどの工夫も必要であろう。

社会福祉法人至誠学舎立川には平成23年度現在8つの保育所と2つの分園で保育事業部を構成し、合同で採用試験をおこなっている。大学や関係機関への就職セミナーへの積極的な参加、ホームページの活用などの広報活動に加え、全園の見学会も積極的に受け入れてきた。

ここ数年来、全国的に公設民営化などにより保育士採用が急増しており、採用に苦慮している保育所が多く、

当法人も例外ではない。保育士資格を取得した学生が、認可保育所にもっと就職してくれるといいのだが、という願いが、今回の研究の動機であった。

6. 課題

各学年の学生が時間の経過と共にどのように意識が変わっていくかを観察するには、2・3年をかけてみる必要がある。

またこれらのデータの分析を進めながら、各大学で実習活動の工夫や学生への働きかけにより保育士への道へ導き、就職率の向上を図る方策を保育現場と共に考えることができると良いと思う。

実習の在り方に関して保育所側からの可能性として、実習を感動的にするための工夫が今後の課題となろう。

より感動的な実習体験を通して保育士の保育所就職を考えるきっかけになればよいと思う。

実習で受け入れた学生を保育所就職へとつなげるための研究を養成機関と連携して今後も続けたい。

引用文献

- 森田満理子 藤枝静暁 2010 「教育実習体験が幼稚園教員としての就職意欲に与える影響」
 神谷哲司 2010 「保育系短期大学生の進学理由による保育者効力感の縦断的变化」